

出題分析			
試験時間	120 分/2 科目	配点	100 点
		大問数	3 題
分量 (昨年比較)	[減少] 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較)	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>例年通り大問 3 題。設問数(解答の数)は 25 で昨年よりも 10 問減少、計算問題は 10 問で昨年よりも 10 問減少、構造決定問題の構造式を答える問題は 4 問で昨年よりも 2 問減少し、問題の分量としては大幅に減少した。また、計算が煩雑な問題も少なく計算問題は標準的な問題が多かった。一方で、大問 3 の構造決定問題の難度が高く、完答は難しいであろう。有機分野の問題が難化したため、全体の難易度としては昨年よりやや難化といえる。自身の有利な科目にやや多めに時間をかけ、もう 1 科目は解ける問題を見極めて処理していくことが必要である。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
1	(1) 電気分解、硝酸の製法、分子の極性 (2) 凝固点降下、レーヨン	(1) 電気分解の計算問題と、硝酸の工業的製法、分子の極性に関する知識を問う問題。いずれも平易。 (2) 前半は硫酸銅(Ⅱ)水溶液の凝固点降下に関する問題。結晶水が含まれることに注意したい。後半は銅アンモニアレーヨンに関する知識問題であり、平易。 知識・選択 5 問、計算 3 問。	標準
2	(1) 結晶格子、単分子膜 (2) COD	(1) ダイヤモンドと CsBr の結晶の単位格子および単分子膜に関する計算問題。文字式で解答するため短時間で処理できる。 (2) COD を算出する計算問題。ブラケットの数値を利用すれば簡単に求められる。完答したい問題である。 知識・選択 2 問、計算 6 問。	標準

設問別講評			
3	(1) 芳香族化合物の構造決定 (2) メラミン樹脂、核酸	(1) 芳香族化合物の構造決定問題。特に化合物 F の構造決定の難度が高く、時間内に解答できた受験生は少ないであろう。また、化合物 A の構造式が与えられていることを見逃さないように注意したい。 (2) メラミン樹脂に関する問題。メラミンの構造は知らなくても条件から導き出せる。また、(キ) の計算問題は付加縮合により増加する原子の種類と数に着目する必要がある。 知識・選択 3 問、計算 1 問、構造式 5 問。	やや難

合格のための学習法

慶應義塾大学理工学部の問題は穴埋め形式であり、主に、知識・選択問題、計算問題、構造決定問題からなる。知識問題は即答できるよう十分に対策し、計算問題は典型問題をこなすことで、解答までの道筋を自力で立てられるような練習をしておこう。構造決定問題は、年によってはかなり難度が高いことがあるため、問題を多く解くことで経験を積んでおこう。数年前の問題に比べると比較的解きやすい問題が増えた印象である。しかし、計算が煩雑な問題も出題されるため、時間内に解き切るのは少々厳しい傾向がある。過去問演習などを通して、時間配分や問題の取舍選択などの訓練をしておきたい。